

## 高校教師のライフヒストリー研究(2)

——組合活動を中心に——

塚 田 守

A Study of Life Histories of High School Teachers(2)  
— Teachers' Union Activities —

Mamoru TSUKADA

### はじめに

文部省と日教組の「和解」という新聞記事の見出しが示すように、最近、組合をめぐる政治的「対立」は軽減されたように言われている。愛知の教育の歴史を概観すると「組合の時代」と呼べる時期がある。その「組合の時代」に若い教師であった50歳代の教師たちはどのように組合活動をするに至ったのか。そして、その後に続く世代は組合とどのように関わっているのであろうか。教師の組合活動に対する態度を歴史的文脈でとらえ、現在の教師にとって、組合とは何であるかを論じようとするのが本論文の課題である。前回の「高校教師のライフヒストリー研究(1)」のベースになっている19人の高校教師の聞き取り調査のデータを用いて、教師の組合に対する「生の声」を引用しながら論じる。組合にたいする態度は、それぞれの教育観、人生観などと密接に関わるものとして重要であることとして、この調査対象の教師たちによって語られた。特に、50歳代の教師たちにはその傾向が最も強かった<sup>(1)</sup>。

教師たちの「声」を聞く前に、彼らがどのような歴史的状況を生きてきたかを教育政策レベルで概観する。

### 1 教師をめぐる戦後史の概観

#### 政府による組合対策、地教行法から勤評

1956年から1959年にかけて、55年体制下の教育政策は教育界に大きな影響を与えた。そのうちの 하나가、新教育委員会法案とよばれた地方教育行政の組織及び運営に関する法律案であり、「地教行法」と一般的に言われているものであった。「地教行法」の主眼は、「教育の政治的中立と教育行政の安定確保、行政と一般行政の調和の推進、教育行政における国と都道府県と市町村の関係の緊密化」の3点であった。この法律の下、教育委員会が「公選制」から「任命制」になった。また、新教育委員会で行われた重要なこととして、「教師の勤務評定」があった。勤評は、財政上問題のある愛媛県に適用されたが、その評価の内容は、「(1)勤務の状況（学校経営、学習指導、生活指導、評価、研究修養、公務処

理)、(2)特性・能力(教育愛、指導力、誠実、責任感、公正、寛容・協力、品位)の2点について微細に評価しようとするものであった」(山住、1987、214頁)。言い換えれば、教師として、職務内容をどのようにしているかだけでなく、組合活動や民間団体についての態度や参加状況などもを評価し、平等な教師集団の中に管理職と非管理職を作り、教師たちを分断する政策であった(堀尾、1994、233頁)。

この勤評に対して、日教組は「非常事態宣言」を発し、「こんにちの状態こそ民主教育の非常事態であることを確認し、覚悟を新たにし、ゆるがぬ団結と統一行動をもって、勤務評定を阻止し、教育の権力支配を粉碎するため、ねばりづよく強力に闘いぬくこと」を宣言した(田中、1996、162頁)。

### 「政治闘争」から「経済闘争」へ

自民党が日教組に攻撃を仕掛けたことに対抗して、日教組は、1961年に「政治闘争」から「経済闘争」へ路線を変え1970年の「人事院勧告完全実施」まで、ストを繰り返しながら闘争した。

それまで日教組は賃金闘争として春闘の統一行動に参加したり、60年1月に結成された公務員共闘会議のメンバーとして人事院への要求行動などを行っていたが、人事院勧告は不十分なものであった。そこで、日教組は経済闘争の主目標として、人事院勧告の完全実施に狙いを定めた。64年8月の7.9%アップ勧告について9月14日に組合員の2割の休暇闘争、同月28日には3割の半日休暇闘争を行い、政府はしぶしぶ1カ月繰り上げて9月実施とすることにしたが、日教組はそれには納得しなかった。

そして、日教組の闘争は、年とともに盛り上がり、66年10月21日、日教組はついに本格的なストを決行した。全国で23都道府県教組が半日休暇または早朝2時間授業カット、他の8県教組も1時間授業カットなどの統一行動に参加した。ストに対しては宮之原、槇枝らが逮捕されるなどきびしい弾圧が加えられたが、日教組は屈せず、4年連続してストを決行した。一連のストに参加したとして行政処分を受けた教師は全国で45万人にのぼった。そして、政府はついに70年、人事勧告の完全実施を決めた。(山崎、1986、91-93頁)

「スト、もうできない財政難」(『内外教育』、1970年5月8日)によると、1968年までの13万、1969年には12万人の処分者を出していたことが報告されている。両闘争の戦術は、7・10闘争の場合は「早朝勤務30分カット」であり、11・13闘争の闘争の場合は「早朝勤務1時間半カット」であった。文部省の調べでは、7・10ストの参加者は16万4,349人、11・13ストの参加者は19万6,880人。文部省はこの2つのストは違法な行為であると判断し、「厳正な措置」をとる方針を示した。処分は、7・10闘争では懲戒処分(1)停職17人、(2)減給1,265人、(3)戒告8,918人、合計1万200人。このほか文書訓告等が8万7,560人であった。11・13闘争では懲戒処分を受けたものは(1)停職178人(2)減給4万119人(3)戒告65,839人で、合計10万6,36人であった。このほか文書訓告等が7万4,339人であった。調査対象の教師の勤務していた愛知県では、1968年7・10ストで、参加学校数85校、スト参加教職員数1,85人、懲戒処分は1,60人、ほかの文書訓告等121人であった。また、11・13ストでは、参加学校数88校、参加職員1,572人、懲戒処分1,573人、文書訓告などなしであった。

この『内外教育』の記事はこのストについての報告を以下のように結んでいる。かつて日教組は勤評闘争や学テ闘争という政治色の強い闘争によって、大量の首切り処分者を出

し、組織率の深刻な低下をもたらした。しかし、1966年以降の「経済闘争」による処分は数こそ多いが、処分内容は軽しい、経済闘争中心ということで組合員も割り切り、組織内には動揺はあまりみられないと。

### 1970年代の教師を取り巻く状況、教師の「管理」の方向へ

山崎（1986、106-109頁）は、1970年代は自民党政府が「組合くずし」のために様々な政策を実行した時期であったと指摘する。行政側は、一方で教研集会を批判すると同時に、他方で教師の研修を組織した。それが行政研修である。この行政研修は、文部省・教育委員会がプログラムを決め、報告者を決め、伝達講習的なものであり、上から下へ伝える講習がもっぱらであったと言われていた。強制的に参加させられ、行かなければ、勤務評定の評定項目からみて「好ましくない教師」「熱心でない教師」というふうにみなされ、自由な研修の権利を制約されると同時に、地方で行政研修を押し付けられる、そういう構造のなかで教師統制が進んでいった。

中教審議が最も重視し、審議に時間をかけたのは教員の政策であった。それらは以下のものを含んでいた。1、管理体制の強化―校長の指導性の発揮、教頭・主任などの管理上、指導上の職制の確立。2、教員養成―教員養成大学の整備、現職教員教育のための大学院創設。3、給与改善―校長、教頭、上級教諭、一般教諭、助教諭の5段階職階賃金の導入、給与水準の引き上げについて審議し、具体的な要領として、(1)新しい教員養成大学および大学院の創設。(2)教員研修の充実強化。一筑波に中央教員研修施設、都道府県教委に研修センターを整備し、長期研修を終了した教員に給与の優遇措置を講ずる。研修成績良好な教員は海外の教育事情を視察させる。(3)教員の身分の確立および待遇の改善といったものを提案した。このように「官製研修＝グループ研修」は、日教組の教育研究会の対抗手段として使われた。

西島（1979）は日教組の小史として、1970年以降の日教組の変貌について論じている。西島によると、人材確保法と主任制度の実施により、文部省による教師の管理体制の確立されたということであった。「主任制度」は教師相互の役割分担の形で存在していた主任とは全く異なり、校長―教頭―主任というタテの管理機構の中に位置付けられることになる。管理職の強化は、自民党の教員政策のもっとも重要な柱だったが、それは主任の制度化によって完成された。主任制度成立の結果、学校の管理社会化が急速に進んでいく。多くの学校で職員会議は「上意下達」だけの場となり、教委―校長の指示を実行するだけの教師が増えてゆく。しかも、こうして管理された教師は必ず子どもを管理する。このように、人材確保法―主任制度という教育政策は、「教育の荒廃」をもたらす重要な要因となり、70年代の教員政策は、高賃金と引きかえに教師に体制への服従をせまったものであり、統制・管理の行政体質がこうして確立されていったと西島は言う。

## 2 「組合の時代」の教師たち

### 2. 1 組合活動に参加して

#### 「読書会」「飲み会」から始まって

1960年代後半は、戦後の「民主的」教育の風潮で、教師にとって「組合の時代」とも呼

べるであろう。ほとんどの若い教師たちは、自動的に組合に入った。「教え子を再び戦場に送るな」というスローガンが基本的理念として共有されていた時代であった。その社会状況で、新任教師たちは読書会を行い、酒を飲みながら「民主教育」について語ることは当時の文化であり、読書会から始まった組合活動であったと言える。当時、新任教師として同じ地域に赴任し、読書会に参加し、組合活動に参加していった教師たちにとって、組合活動、組合とは何であったかを中心に聞いてみた。

社会情勢から生まれた若い教師たちの「読書会」、そこには「組合意識」というよりは「仲間意識」がまずあった。そして、そこには、理論的、思想的に優れた先輩教師たちがいた。そのような読書会に参加して組合活動を参加した1人である岡村さんは言う。

人間関係。あの頃みんな組合入ったんですよ。みんな入ってましたから、入っていない人いないんじゃないかなあ。ですから、「読書会」、「飲み会」にしてもみんなも組合の連中ですよ。だけでも、その当初はそれほど「組合意識」はないんです。僕ら若者ですから。新任当時年齢で言うと、20歳代初めぐらいのとこじゃないですか。そんな「組合意識」なんかないですよ。労働組合自体よくわからないぐらいですからね。だからみんな組合員なんだけど、若い者同士の何て言うのか、あの頃で言うと「仲間意識」みたいなものが先だったんでしょね。……………

先輩教師たちの魅力とリーダーシップに惹かれて、「読書会」をやりながら「群れていった」だけの彼等であったが、組合員としての役割を担ってさまざまな活動をするようになる。当時は、教師によるストライキが行われた時代であった。それぞれの学校で、組合の委員になっていった。しかし、岡村さんの組合の活動は、責任感でやっていただけであったと言う。

…昭和46年前後から組合活動もかなり盛んな、愛知県だけじゃなくて、全国的にね。そういうような時期もありましてね。私もA高校の時には、青年部の地区の役員なんかも押し出された方でね、やったことがあるんですよ。青年部の役員みたいな感じでね。決して進歩的な意味じゃあないんです。僕は、非常に保守的な人間ですからね。ただ僕は言われたら、一生懸命やるということしかやらないだけですけどね。

岡村さんの場合には、「人間関係」で役割を担い組合活動をやっていただけであった。心情的には、「保守的」であったので、教師としてストライキをすることが苦痛であったことがうかがえる。役割として「まじめに果たす」組合活動であった。

…学校委員として、分会の仕事は一生懸命やりましたよ。だけでも、何て言うのかなあ。要するに、組合員として単純に労働条件の問題、それから賃金の問題、労働時間も含めてね、そういうものについて何とかしてほしい、それはやっぱり組合がしっかりしてないと駄目なんだ、これははっきりしとるんですよ。労働組合の存在そのものは。だから、それは学校の学校委員の立場として、これはどうしてもやらなきゃいけない。

岡村さんにとって、教職員の組合活動としての要求を実現してゆくための活動は正当であると考えられたが、当時の組合が一つの政治的立場を明確にする選挙に際し、岡村さんは自分の心情と相容れないものを感じ、組合活動から実質的に距離を持つことになる。

愛知県の知事選があったんですよ。知事選の時に、愛高教の書記長がね、立候補したんですよ。知事選候補に。A党から立候補して。僕はね、そんな思想的に詳しいわけじゃないもので、愛高教はどんな路線にあるかだいたいわかってたんですけどね。…僕もそれで一気にね、自分の今までやってることに対して、自信がなくなったと同時に嫌気がさしてね。

政治色を明確にした組合活動は、岡村さんにとっては受け入れられないものであった。それは、岡村さんが育った「家族の伝統」によった。

………思想的に僕はそういう家で育ってますからね。………それから僕自身もそういう目でもって見る習慣がついていたからね。小さい頃から。だから、僕もそう見られてるんじゃないかということを考えると、家族に迷惑をかけちゃうし。家族を無視してまで活動する意欲は、さらさらないものでね。

このように、岡村さんの組合活動は、「人間関係」から始まったが、心情的なレベルでは「保守的」であったので、組合活動が政治的な立場を鮮明にした時、実質的に距離を持つことになった。

#### 「仲間意識」で組合活動に参加して

岡村さんと同じ時期にA高校に勤務し、組合活動に活発に参加した青木さんの場合もまた、「組合のイデオロギー」というよりはむしろ、若き教師たちの「仲間意識」であったと言う。「組合つぶし」のさまざまな政策に対して、様々な戦術で対抗していた。しかし、そこには、イデオロギーはなく、「仲間意識」「群れる若さ」があったのではないかと青木さんは振り返って言う。

………（私は）愛高教や日教組だった。いわば30年も組合やった人、一応やったわね。自分のイデオロギーがあったかというね、振り返ってみるとそうあるわけじゃないわね。…年をとってきたせいなのかもしれないけど、あのときに教頭を締め上げたとか、団体交渉で校長締め上げたとかいうような、いかにもこっち側の理論で言っただけで、当時は真剣に言っただけだと思うんだわ。「教え子を再び戦場に送るな」という。…たぶん、イデオロギーというものがなかったらと思うな。「付和雷同的に」っていうか一つの青春の意気がってやってたところがあると思うな。教員の組合活動ってだいたいそういうもんだと思うよ。グループで意気がるというか、徒党组んでというか。徒党组むと相手との違いはやっぱり鮮明にしないかん。

そして、組合と政府の間で対立していた項目が、政治のレベルで「解決」されてしまし、

組合活動を方向性を失った時、青木さんは組合活動への積極的な関わりをしなくなった。

…年をとるといふか、一新任教師の段階は4年ぐらいで通り抜けて、その後15、6年組合活動に親しんで、その組合活動の目的がまるで急にすこんとなくなっちゃうみたい。田中角栄の人材確保法かなにか知らないけど、教員の給料上げましたよね。その時、角栄というのは天敵みたいな男だったけれども、そういうことやっとなだ。いわば自民党の影の将軍といふか。片方で金を上げながら、同時に地方の教育委員会に自治省から天下りで来た人がちゃんとそういう組合活動を抑える石はもう打ってあるわけだね。

このような行政レベルでの教職員の待遇の改善が行われると同時に、運動の方向性が、一般的な組合員を惹きつけなくなった時期に、「組合つぶし」の動きが起こってきた。その「組合つぶし」に対しては抵抗していた青木さんであったが、組合活動をしている「仲間たち」との情緒的關係に嫌気をさし、その後は、自分の好きな勉強をすることに喜びを見出し、組合活動には積極的には関わらなくなった。

このように、50歳代の岡村さんと青木さんは「組合の時代」に生きたが、「経済闘争」が一段落ついた段階で、若き時代の「仲間意識」がその後の組合活動を進める原動力にはならず、組合から実質的に距離を持ち、岡村さんの場合は教育に熱心な教師として、青木さんの場合は専門学習を楽しむ教師としてその後のライフコースを進むことになる。

## 2. 2 組合活動に不信を感じて

### 不信感を持つ事件を経験して

時代の流れの中で組合活動に参加し、ある年齢になった時に、自然に距離を持っていった人ばかりではない。組合活動に参加して、「不信感」を持ち、その後、組合活動に批判的になった教師もいた。

組合活動に積極的に参加していた今井さんは、組合の組織そのものに不信感を持つ事件を経験する。今井さんはその時の「怒り」を振り返って言う。

愛高教の分会代表みたいな仕事をやりまして、2年ぐらいやってました。僕はそこで一つの大きな転機を迎えるんですけど、…C高校でもD党の人ももちろんいまして、いろいろあるわけですけども。支部役員と言いましてね、いくつかの学校が集まりまして、その中から愛知の支部の役員を出すわけですね。それも大変なことでして、その人が授業持たない分をこっちの先生が分けて持ってしまうなきゃいけないとか、…結構大変な仕事ですからね。僕はC高校の学校委員をやりながら、「学校の支部の役員は出せない」と。…だいたい、12月から2月の中頃までが、主な議題の他その他の議題でいつもそれを会議やってるんだね。「…だいたいC高校からは出さない」ってことで、その正式な役員会ではうまいこと言っとったのに。結果論から言いますと、……その人はD党の人ですけど、誰々が支部の役員になるということを影で決めとるんだね。…2月の後半ぐらいから決まって、その人が出るというふうになりましてね。その時はもう激怒しまして、…こう積み上げてったのと、別のところでつくってるんですよ。組織

してるんですよね。しかもそれは僕たちを外したとこでこうやってまして。…それを怒りましてね。

このように、今井さんは組合を後ろで操っているグループの存在に不信感を持った。そして、その事件以来組合活動に対して、今井さんは対抗する立場をとっている。

### 「責任」をとらず「権利」を主張しすぎに違和感をもって

大谷さんは組合活動には参加したものの、組合の要求していることは、あまりにも「無責任」で「権利」を主張しすぎると年とともに感じた。そして、組合に対抗する管理職の責任感に共感を覚え、組合に批判的になっていった。大谷さんはその心情を振り返って言う。

組合っていうのはね、欲求で要求しておる。それは経済的な要求が中心になってきておる。簡単に言うと年休をとるとか、給料を増やせとかが多いんですね。それはそれで別に間違いではない、そのこと自体は良いと思うんですけど、「権利」を主張しすぎです。もうちょっと言えば、教育に対して無責任という印象があります。若い時は、それでフィットしとるんですけど、世代の違いとか、若い人は何考えとるんだというような歳になってくると、そういうことが組合入っておろうが入ってなからうが「責任」が大きくなってきますから、集団に対する「責任」というのか、そういうふうになってくるとそこから離れがちになってきたな…。

今井さんと大谷さんの場合、時代の流れの中で組合に参加したが、組合の組織、組合の人々の態度に対して批判的になった。結果として、この2人は管理職になり、組合対策を行う側になっていくことになる。

## 2.3 「組合の時代」から継続して

### 「組合づくり」のリーダーとして

「組合の時代」であったが、伝統進学高校に勤務した竹内さんののは、当時としては特殊な組合のない学校に勤務していた。子供の頃から、社会的不正に対して「怒り」を覚え、大学時代に学生運動に参加した竹内さんであったので、「組合づくり」で教師の労働条件の改善に貢献したいと考えた。

…組合がね、その当時のE高校は認知されてなかったんですよ。僕らが行った頃にね、組合員が5、6人っていう話があったんですね。僕は当然、「弱き者は組合」という組織で力を合わせて改善していくもんだっていうのが当たり前だ、という感覚で来たものですから。すぐ組合に入る話したんですね。むしろ先輩教師たちが「いや、ちょっと待て」って。…その時代では特殊だったです。若い教員がほとんどいない中で事務の若い人や講師の人やなんか入れてね。まずは、僕が中心みたいだったんですけど、「いろいろと愚痴を言い合う会」を作ったんですね。F分校の先生にも呼びかけて一緒に集まっ

て料理を食べたりして、次の年には若い人も入ってきてね、そういう人たちをまとめて。…10数人になって、本格的にストライキやるということになって。

ストライキをすることで、労働条件などの改善を訴えていったことは、当然やるべきことであった。しかし、その時の熱気は、今の組合にはないと竹内さんは言う。

…組合のストライキは時代ということもあるけどね、やっぱり、当時公務員の給料が非常に安くて、僕自身給料は決して良くないってことは承知の上で教員になったことは事実ですけどね。だけど、ちょっと大げさな言い方かもしれないんですが、やっぱり落ち着いて教育やるためにもね、こんな給料体系ではまずいという気持ちはあったように思うんですよ。

「ストライキの時代」が終わり、組合にとっては厳しい時代がやってくるが、竹内さんは組合員であることで「迫害」されることが多くあったと言う。

…転勤が増えていったりした中で、組合的には、どん底みたいな感じの。当時のA高校でいけばね。今の時代に比べたらまだいいですよ。でも、…一種のどん底みたいな非常に厳しい時代を迎えたことがあるんですね。…支部長とか職長だとか当番でくるんですよ。ちょうど当たり年で、たまたま僕がなる可能性があったんですが、非常にA高校が厳しい時代ということで幸いにもパスしてもらって。だから、学校の外へ出た役職へついたことないですけども、組合の方もそうずっとやってきてますね。組合の方やてなければね、そこまで迫害されませんよ。

「社会的正義」を問いながら、「出世への野心」を持たず、組合の仲間と組合活動を継続してきた竹内さんにとっては、組合は今も重要であり、「迫害」されている少数派であると感じながらも、組合の「意味ある仲間」としてともに生きているのである。

### 組合活動を中心に生きて

もうひとりの組合活動を続けている田辺さんの場合、組合職員団体の役員として、教職を休職して5年間の教育運動を中心に教育政策などの分析をしてきた経験を持つ。大学時代、さらに、最初の勤務高校であった工業高校の6年間は、組合活動などに対して「意識が低かった」ことに対して「負い目」があり、工業高校の先輩教師の影響で、組合活動をするようになった。職員として働いていた時の役割について言う。

…地方公務員法の中に職員団体の役員に、…一応、4人休職で高校関係は入ってるんですね。そのうちの1人ということで行って、5年間C市の方へ行って。…教育運動を中心に担当したんですけども。例えば、県がいろいろ出してくる教育政策を分析するとか、…新聞社等からコメントを求められるものですから見解を言った。それは自分の見解よりも、…その方針案というのが代々ありますから、それでものを言うということがあるんですけどね。いろいろな職場からいろんな、例えば、「休職をして海外青年

協力隊に行きたいけども行けるか」「事故を起こしたけれども、どうなるのだ」「部活の時に引率で事故を起こしたけども責任はどうなるだ」とかささまざまな教育相談を持ち込まれて、例規集を法規を見てみたり、教育委員会と掛け合ったりとか。

組合のさまざまな活動の中で、特に教育運動に焦点を当てて活動をしてきた。職員になる前から、そのことには興味を持ち、研究会には自主的に参加していた田辺さんであった。その研究会で、組合の原理と田辺さん自身が関わっている「民間教育運動」との間にギャップがあり、組合に対して違和感もあるとも言う。しかし、それ以上に、そのような民主教育研究会が、最近では、「グループ研究」によって、その伝統と本質を崩されてつつあることに危機を感じている田辺さんである。

…グループ研究というグル研というのを組織し始めた。そこで、教師のまだ勉強したいという欲求と、よその学校の例えば…工業高校とか職業高校とかなかなか自分の思い通りにできないという学校の先生たちを集めて、進学校の先生たちと一緒にフリー・ディスカッションさせ「あなたもいつでも替えられるチャンスがあるんだよ」という式のを用意することによって、一定の期待感みたいなものを培うのを官製が用意し始めたんですね。これは一つの組合対策。…それは、単純に組合攻撃をするというレベルではなくて、元々の職場を越えて交流をしたいという…それに代わるその役割が、グル研に行ってもそういう役割があるぞということになると、…管理職にも誉められるし、ひょっとしたら、進学校にも転勤してもらえるかもしれないから、そこでいい意味で目を付けられようという役割を果たしたというふうに思ってます。これは残念なことだと思うね。組合の側からすると。残念な気がするんですけども、客観的にはそういう役割を果たしてるなぁと思ってるんです。

田辺さんの現在の組合活動を続けている意味づけとして「組合は、人のため、自分のためのボランティア活動である」と言う。田辺さんが教師として生きてきた中で組合活動は重要な位置を占める。組合活動することは他の人のためのボランティア活動であり、自分の「生きがい」として続けていると言う田辺さんである。

このように、竹内さんと田辺さんは共に現在も組合活動を行っている教師である。竹内さんには、組合活動をすることが正義であり、「意味ある仲間」との継続的關係をも持ちつづけることであった。また、田辺さんには、組合活動の中でも、その教育運動のなかに教師としてあるべき姿を追求しているのである。

### 3 次世代にとっての組合

#### 3.1 前世代を受け継いで

現在30歳代あるいは40歳代の教師は、1960年代から1970年の「組合の時代」にはまだ教師ではなかった。彼らは、高校生だった頃に、恩師たちの組合運動を見て育った世代である。この次世代の教師たちのなかで、恩師あるいは先輩教師たちの考えを受け継ぎ、現在も組合員として活動している教師たちの声を聞いてみる。

### 恩師たちの世代にあこがれて

30歳代後半の山田さんは、現在は、組合に入って組合活動をしている教師である。高校時代に1世代前の恩師たちの世界にあこがれた山田さんは、大学生の時に、大学のサークルで学生運動的な活動を行った経験を持つ。その経験が直接的に、現在の組合活動につながっているとはいえないであろうが、大学時代の経験は山田さんにとって重要であった。大学での経験を通して、「自由である」ことが、山田さんにとって重要であったが、新任教師として赴任した高校は新設校で、彼が思っていた「自由」はなかった。まず、そのことが、組合活動への1つの要因となったようである。新設校における受験至上主義が、教師の「権利と自由」を犯している。

…愛知県の教育行政のうまいところだと思うんですけど。…受験至上主義にすることによって、まず単純に言って、すごく忙しければ、組合活動やってるエネルギーがなくなっちゃうし。古い学校っていうのは組合が強い。そこで、新設校が古い学校より良くなれば。…古い学校も今度は「お前らがそういう『権利』、『権利』とかとろいこと（馬鹿げたこと）ばかり言ってるから、隣の学校に抜かされちゃったんだ」と。「だからこれからはこの学校も旧態依然とした安楽なことばかりやってないで、ちょっと拍車をかけるぞ」って、またちょっと補習を始めて。

受験至上主義こそが、高校教育の歪みを起こし、教師の「自由」を犯すものである。それに異議を呈示してゆくことが、組合の課題であると山田さんは言う。

…（組合では補習を）問題としては認識してますけど、正面きった問いがないですね。最優先課題にはしません。でも、それこそが最優先課題にしないといけないと僕は思っています。（補習は）…義務じゃない以上断れるんですけど、法的には。断わるという生きるのが難しくなるのはあります。人間関係とか。そういう意味で。僕自身はわりとそういうこう割り切り方ができる人間なんですね。それが僕自身が早朝やらないということは、誰かにしわ寄せはいくんですよ。

ほぼ強制的にやらなければいけない補習に対して、拒否の意志を貫こうとした時に、山田さんは、実際に組合を作る行動に移したと言う。

…僕が「食事会をやりましょう。」って言うと、「食事会」っていうのは隠れ蓑で学校の補習について話し合おうというふうにみんなわかってたけど、結構集まってくれたし、若手が。組合入ってない連中ばかりですよ。むしろ組合に入ってる人間が、僕の行動を過激だって言って、嫌いました。

補習に対する批判をすることを教師の地位向上という組合活動にしようとしたが、それに対して、他の組合員から批判がでた。その頃から、山田さんは愛高教という組合の運動方針に疑問を感じた。

他で当時分会を作ろうと思って、B校の組合員を招いたんですけど。C高校の僕の行動を批判したんですね。「そんなのは浮くだけだからやめろ」て。「浮いたらおしまいだ」とかって。…浮いちゃえば組織ができない、大きくならないでしょ。…浮かされちゃったら。「これだけの非道なことが行われてるのに、組合としてバックアップしてくれないのか」って、僕は思ったんですよ。…「そんな過激な行動か」って。「職務でもない補習をやらないっていうのが、過激なのか」って僕は言うんですけど。

当時の組合のテーマは、教職員の待遇ではなく、もっと政治的なものだけが中心であった。その基本路線に対して疑問を持ち、分裂の時に、少数派であるD組合に入ることになる。

…国際問題も大事だけど、教職員組合というのは、先生達の組合なんだから我々が本当に職場で実感している問題をもっと解決してほしいというのが僕の強い希望だったんですよ。愛高教で僕は大会とか地方委員会に積極的に出て行って発言したんですね。愛高教の本部の方も安保がどうのこうのとか、天皇制がどうのこうのとか、消費税どうのこうのとかね。そういうのは本部のイニシアティブ、リーダーシップとってくのに、補習の問題とか部活の問題なんかだと取りあげてくれないんですよ。その理由が「分裂しちゃうから」って。だから組合の中にも補習をどんどんやるべきだっていう人もいる、やりたいっていう人もいるわけだし。

このように山田さんの組合活動は、現実の教職員の待遇問題、学校の問題などがテーマとしてあり、1世代前の「政治的」運動は、必ずしも継続はしていない。しかし、県の教育行政に批判的であった恩師たちの「遺産」を受け継ぎ、受験至上主義から派生する「労働問題」について組合活動をしているのである。

### 同僚に誘われて

組合に入っているのは、勤務した学校の組合の状況にもよる。田中さんの勤務していた学校は、組合の強い学校であり、「信頼して話せる」同僚が組合に入っていて、誘われて入った。田中さんにとって、組合のイデオロギーは重要でなく、「人間関係」によって組合に入ったことになる。

…組合に入った理由はね、同僚が組合多いんですよ。若い人がね。30代とか40代とかね。先輩たちがね。…組織拡大運動。組拡って言うんですけどね。入りそうな若い人に手紙を書くという作戦とかね、いろいろあるんですよ。で、それは後で知ったけど。お手紙もらったですね。僕が信頼してる人からですね。そういう状況で入らざるをえないわけですね。

そして、現在も組合活動を続けているが、続けている理由もまさに「人間関係」であるという。組合を続けていることで、いやがらせもあるが、田中さんは組合員以外との人間関係では、自分の居場所が見つからないようである。人事異動で、念願かなって名古屋市

内に転勤が決まった時、校長からに言われたことを振り返って言う。

…その時に校長は「約束がある。しろ」って言うんだね。どう言ったかっていうと、「向こう行ったら組合抜けろよ」って。うなずきましたけどね。「わかったな」って僕を私的に。…あの頃は校長たちの使命はとにかく「組合つぶし」ですから。…「（組合を）やめろ」と。

このように、組合に入っていることは人事異動に「否定的」な要素として影響すると田中さんは考えているが、田中さんにとっては、組合の仲間とすることが心から落ち着く居場所である。それに対して、教育会<sup>(2)</sup>には「封建的な人間関係」を感じると言う。

…仲間がおってね、そこは本音でしゃべれるっていうんですか。常識でね。そういう変な遠慮も気兼ねもいらないうていうかね。…日本教育会に新入るんですよ。でもやっぱり嫌がるのね、みんな。そりゃあそうですよ。はっきり言ってうさんくさいですからね。無理に入れられますからね。教育会の会合だっていっても、まさに封建的な人間関係なんですよ。要するに「ここはみんな偉い先生です。よく聞きなさい」みたいな。若い人はそもそも、組織嫌いだから、嫌なんです。

組合員の仲間の中で「自分の居場所」を見出し、「人間関係」で組合活動をしている田中さんである。支部から指令に協力する程度の活動が日常的な田中さんの組合活動である。1世代前の教師たちのようにストライキをすることなどは時代にそぐわないことでもあるが、田中さんはそれほど政治的には組合に関与していないように思える。

#### 人間関係で入って、辞めたいけれど…

先輩の同僚と勉強を一緒にしていて親しくなり、その人間関係で、組合員になった上田さんであった。その経緯について聞いた。

僕はあんまり組合の闘士じゃないです、実は。何で入ったかと言ったら、Aさんなんかの影響ですよ。Aさんもそう「入れ、入れ」とは言わなかったけれども、何となくいつも一緒に遊んでるうちに組合へ。Aさんが来たのは、4、5年目で。僕ね、来たときの指導教官というのについてたんですけども、それがBさんちゅってね。今C高校の校長やとって…最初の時は割合よかったんだけど、だんだんだんだんね、Bさんがあっち側に座ったとするとAさんはこっち側の人で。Aさんが来るあたりから、だんだんだんだんこっちへどんどんどんどん寄ってくわけだ。Aさん側になって、指導教官とは最後大喧嘩をして。…いつのまにか、それも含めてだんだんだんだん仲良しになっていって、「まあじゃあ、組合も入るか」と言って。

組合に入って、熱心でないけれども組合員の役割は果たしてきていると言う上田さんである。

入ったその年に学校委員にさせられてしまってえらい目にあったことを覚えておりますけど。……結局、組合がありますよね、学校委員というのは要するに組合の代表なんです。分会長とかいうのはあるけども、それはあんまり仕事はしないんですよ。学校委員が毎週組合の会があって、そこ行って情報交換するわけだ。

上田さんの組合活動についての話し方には、必死なところがなく、淡々と言っているようであった。しかし、実際は組合に対する社会的圧力もあり、その果たす役割があると言う。

…今弱小団体（今の組合）なんだけれどもやることがいっぱいあるんだね。地区労だとか、中電の訴訟だとか、ありとあらゆる世の中の問題をすべて請け負っとるわけですよ。自分と学校のことも、あんまりたいしてできとらん組合なのにもって地域の組合の代表みたいな仕事をしとるんだね。だから、やれあっちへ行って今度は応援せなかん、何とか訴訟の応援してくれ、アンケートを配ってくれ、ピラを配ってくれとか、現実にあんまり学校は関係ないんだよ、それこそ。だから職員はあんまり協力してくれないもんだから、学校委員だとみんなそういうふうな、つぶして出ていけないかん、場合によってはね。

組合であるにも関わらず、学校のことや教職員の待遇などを扱わない組合にたいして、政治色が強いことで批判的になっており、辞めたいと思いつつ行っている上田さんである。

僕なんかは、対組合について言えば、反。元々は保守的な人間もんで、どうも。組合も結局、政治的な色で動かされとるみたいなのところがあるね。A党系の人たちがそれを使ってみたいなのところ。ただ、そんなことでもないとなんかことは馬鹿らしくてやっとなんかのじゃないかなと思うけど、それは僕の外から見た気持ちだけだね。…「やめたいな」と思うんだけど、まゝ今は組合の副分会長にまで。

「人間関係」で組合に入った上田さんであったが、組合が弱体化して行く過程でも組合員としての役割を果たし続けている上田さんである。しかし、現在の「政治色の強い組合」に対しては、心情的には共感出来ず、「やめたい」と思っている現在である。

このように、組合活動をしていた恩師への憧れがあり、新設校の現実直面したことで組合活動をしている山田さん、同僚に誘われ、組合の仲間の中で居場所を見つけた田中さん、そして、同僚に誘われて入ったが、やるべきものとして組合の役割を果たしている上田さん、3人が3通りに組合への関わりである。そこには、「組合の時代」とは違った多様な組合の教師の姿がある。

### 3. 2 組合を批判的にみて

#### 組合に反発を感じて

生徒ための受験指導に熱心な林さんには、組合員の教師は「怠慢な教師」「権利意識が強い」と思われ、組合に対して批判的である。最初に勤めた母校の名古屋市内の高校では、同僚の組合の教師が「人間関係」で誘ってくることに對して、きっぱりと拒否する林さんである。

教員になって半年経ってからですけど、組合から攻勢があって、「入れ、入れ」ってなるんですよね。「僕はそんな嫌だから」って、組合の人の職員会議の意見を聞いたら、非常に退廃的だったんで。だから、「僕はそういう面は話したくない」ってはっきり言ったんですね。僕の恩師も組合ですからね。「お前なあ」って情に訴えるわけですよ。そんなとんでもない。僕は「自分の学校、育てていただいた学校の生徒、後輩を教育しなきゃいかんから、そんな絶対嫌だ」って断りましたけどね。

そして、組合の教師は、一般的には生徒のことを考えていないと林さんは批判的である。自分たちの「権利」を主張し、建前で話し、現実の受験に対しての認識がなく、反対のための反対をする人たちであると。

……建設的じゃないですね。例えば、補習を例にとりますとね、「補習なんかはやるべきじゃない」って言うんですよね。「ちゃんとカリキュラムの中で、授業の中で勝負してけばいいんだ」というふうにおっしゃられるわけですね。確かに本筋から言えばそうですね。だけでも、それだけで力がつくことは絶対あり得ないですね。それじゃあ、カリキュラム以外のところで家庭学習の大切さについてね、生徒にどういう指導をして、生徒もきちっとそういうふうに先生の言う通り家庭学習やってくるかという、やってこないですもんね。それに関してどういう指導をするかって、なんにもないんですよ。ただ反対なんですよね。

組合活動自体が、教師としての義務の怠慢ではないかととも批判的である林さん。

水曜日の午後は組合の人は学校委員っていうのがありましてね。組合の人は授業をやらなくて組合の本部へ行けるんですよ。職専免みたいですね。ありえないんですよ、本来は。組合の本部へ行って組合に回遊して帰っちゃうというね。本来なら学校で勤務しとらないかんですけど。…結局先生が楽できるってことですね。なんにもやらなくても過ごせるという。……だから部活の顧問はやらない。補習もやらない。夏休みはまるまる40日休み。…そういう人が何人もいますよ。教員になった時驚きましたもんね。1回も顔見たことない。僕は教員になって何年目だったか覚えていないですけどね、運動部2つ顧問をやったもんですから、夏休みね、週に日曜入れて3日しかなかったですよ。ずっとあとは勤務してました。会ったことない先生、もう山といましたね。

生徒のことを考え、受験指導などで熱心にやろうとする林さんにとって、組合の教師のやっていることは教育者としての怠慢としか思われないのである。

林さんは、1世代前の教師のように組合活動経験は持たないが、教育者としての立場から組合の教師を見て、怠慢であるとする。林さんの世代では、組合の政治的意味よりも、受験体制のなかでいかに生徒のためになるかを考えることが第一課題となる。

### 3.3 組合とは関係なく生きて

「組合の時代」より少し遅れてきた世代のなかには、組合サイドにも管理職サイドにも違和感を持ち、「独立した」態度をとり続ける人もいる。ある時期には入っていたが、あくまでも、「一応入っただけ」であって、活動にあまり参加しなかった教師である田村さんの場合は両者から距離をもった態度である。

僕の個人的な性質かもしれないけれども、体制だとかなんかっていうのは僕は悪いとは言わないけども、いわゆるエスタブリッシュメント（体制）っていうのは一つの流行があるんですね。流行っていうのは、「わぁーっ」とこっちに行っと思ったら、こちらに、「だぁーっ」と戻ってきたりするんですよ。意外に安定してないんですよ。非常におおざっぱな動き方をしてね、それに対して、どうも着いていけないなという。それが文部省、県教育委員会等の方針もしかりだし、大きな組織である組合の方針についても、やっぱり非常におおざっぱなんですよ。だから、その部分にどうにもついていけないから、ある意味では、こじんまりと自分の世界を持ってしまったっていうところ、あるでしょうね。

愛知県の組合の特殊性とその時代の背景について説明し、組合サイドと行政、管理職サイドの対立関係に触れるが、組合サイドの立場をとるほど、行政に対して批判的にはなっていない田村さんである。また、田村さんは「組合つぶしとしての教育会と言われているが、強制的に組合を抜けさせるようまではやっていなかった」という言い方で、管理職は役割に応じてやっただけであると考えている。そして、田村さんは組合に対しても批判的である。

何となく愛高教そのもののイデオロギー的色彩が強いし、ある程度の年齢になるとイデオロギーで、旗ふってって、なんとなく、着いていけない連中もいるし、かといって組合がなくなったら上意下達の形になると本当にまずいなあっていう危機感を持ちながらね。ある意味では自分がある年齢に達してくると、若い先生たちを使いながらね、責任のある仕事をしていかならん立場でしょ。そういう時にあんまり純粋なことも言っておれないという部分があっけね。それでまあ、自分が望むと望まないとに関わらずねえ、ポジションっていうのはきちょうんですよ。何々部長というようなのがねえ、…大体、40歳を過ぎるとくるんですよ。…その頃になるとやっぱり悩むです。

ある程度の年齢になった時、仕事をうまくやるために、妥協しなければならない。だか

ら、組合員のように、理論的に純粋なだけでなく、「体制」側にも妥協しなくてはならないと田村さんは考え、さまざまな問題のなかで、「自分なりの好み」で行動するという。

もう少し若い世代になると、「組合」は時代の産物であり、いまの自分たちには、あまり大きな意味を持たないという教師たちが多くいる。調査対象者の中では、直接に組合活動経験のない45歳以下の4名にはそのことが当てはまる。愛知県の高校の組合加入率が40%以下になったことを考えると、若い世代では、このような教師が多いであろう。そのうちの1人である西田さんは、極端なイデオロギーをもたなければ組合であるかないかは関係ないと言う。

戦後極端な民主主義教育を受けてたわけだから、あの頃はだからみんな組合でしたね。だから、そういうことを直接感じたことが自分が小学校の時でありね、そういう教育を受けてる人たちはやっぱりそれがネックにあると思うんですね。あるいは、その時小学校だった人たちに教えてもらってる年代の人たちもそうかもしれないですけど。…組合やっとなって今管理職な人っていうのはいくらでもおります。…ほとんどそういう雰囲気じゃなかったかなあ。例えば、うちの学校における主任の半分ぐらいは組合員の人ね。仕事そのものを普通以上にやりますから。僕、組合員だからどうこうでやっぱり分かれとるんじゃないくて、やる人はちゃんとやっとなし…今50歳から55歳ぐらいの人たちの時はほとんど全員がストウったんじゃないかね。

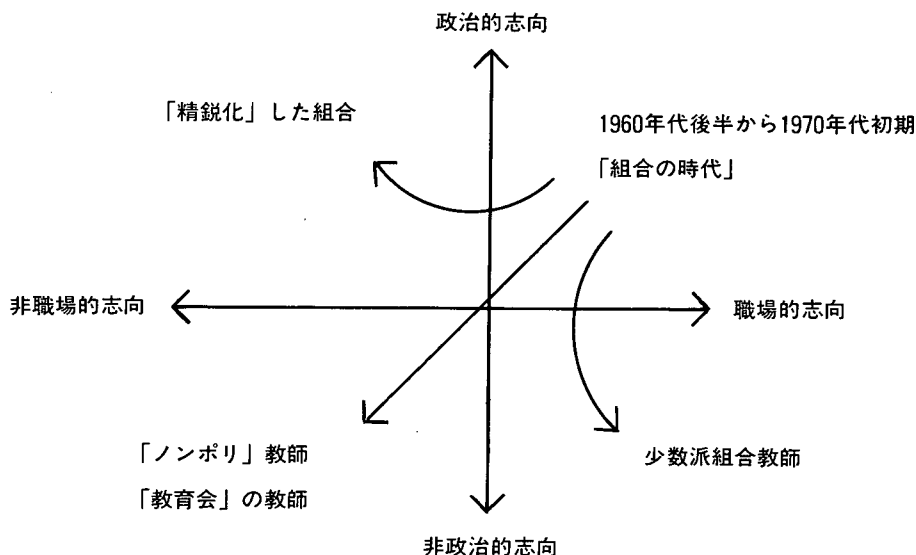
ストライキなどをやっていたことは、あくまでも、「組合の時代」のことであったことで、現在は、あまり関係ないという。「時代の産物」にすぎないという。そして、より若い世代は、組織に属するよりは、個人の教師として活動することを望んでいるようである。

#### 4 組合活動と歴史的変遷：図式的分析

調査対象となった教師たちが組合に対してどのような態度をとってきたか、そして現在どういう態度をとっているか図式的にまとめてみよう。組合との関わりで2つ基軸が重要であると考えられた。1つは、組合活動に「政治的志向」があるかどうかである。もう1つの軸は、組合活動の「職場への関与」があるかどうかである。

第1象限は1960年代の後期から1970年代初期にかけての「組合の時代」を象徴するものである。安保改正などに関連して、若い教師のほぼ100パーセントの教師が政治的運動に参加しただけでなく、職場の労働条件改善運動としても参加していた。「組合の時代」が終わると教師たちは3つのグループに分かれていった。組合に関わり続けた教師は大半が政治的な運動を継続し、活動を「精鋭化」してゆくグループであり、このグループは第4象限に位置づけられる。また、極少数ではあるが、職場の問題に限定して「労働運動」としての組合活動を行うグループは第2象限に位置づけられるが、このグループは組合の「政治的側面」を嫌うが職場の問題を取り扱う活動を支持するグループである。さらに「組合の時代」を経験しなかった教師たち、あるいはその時代を経験しても「反発」をした教師たちのグループは第3象限に位置づけられ、現在の教師の大多数を占める。その中

## 組合活動と教師



で、組合に関わらないだけのグループと「教育会」に入り積極的に「管理職」を志向し、「組合つぶし」をしたグループと2つに分けられる。

## 5 まとめ

この聞き取り調査から、愛知県の公立高校教師たちにとって組合活動とはどのような意味を持つと言えるだろうか。その特徴を4点にまとめた。

まず第1に、組合活動にどのように関わろうと、高校教師として教育現場で生きてゆくためには、「受験体制」を無視することができないということである。組合のイデオロギーによって受験体制を批判し、補習などを「受験競争の激化させるもの」と批判しても、それを組合組織のコンセンサスとして提案することができないのが実状である。そして、組合員として「補習を拒否する」と言っても、「怠慢である」「生徒のことを考えていない」「協力的でない」等の批判を受け、教師として生きにくくなる現状がある。その意味で、組合はイデオロギー的には受験体制を批判してはいるものの、組合活動も制度化された受験体制を前提し、全面的には否定していない。

第2として、愛知県における組合活動は「時代の産物」とであると言える。現在、50歳代の教師たちは、若い頃に「組合の時代」を経験する。その時代は「安保の時代」「学園紛争の時代」でもあり、「民主教育」を守ために、教師たちは体制に批判的であった。その時代に生きた教師たちにとって、組合活動こそ、教師生活の中で語られるべき「意義ある出来事」であった。そして、愛知県では、「組合の時代」「荒れる学校」の風潮に対する行政な対策が強烈に行われた。組合と体制の対立の強烈さは、高校の組合がイデオロギー的色彩の強い立場をとったことによる。そして、今や、その対立の争点があいまいになり、

「組合の時代」は終わったと言われている。「組合の時代」を直接経験していない現在45歳以下の教師たちは、組合に対しては無関心か批判的態度をとる傾向がある。

第3として、「組合の時代」に組合に参加した多くの教師たちは「イデオロギー的立場」で組合活動に参加したというよりは、「仲間意識」で参加した。イデオロギー的立場の明確な「先輩教師たち」の指導の下、「体制からの圧力」に抗する形で、「読書会」「飲み会」を行い、「仲間意識」を形成し、教師として「民主的教育」を守るために管理職を批判したのであった。

最後に、現在も組合員であることは、愛知の高校教師にとっては、一つの「政治的態度」の表明であると解釈される。組合員でいたことが管理職への「経験」と考えられることもあるが、組合員であり続けることは「管理職への道」を放棄することを意味する。これは、多分、愛知県の高校教師には当てはまるが、小・中学校教師の組合には当てはまらないし、他府県の場合にも当てはまらない愛知県の高校を取り巻く特殊状況と言えるかもしれない。

#### 参考文献

- 鎌田 慧 1986『教育工場のこどもたち』講談社  
 田中節雄 1996「高度経済成長期の教育思潮」『教育総研年報 '96』：162-166。  
 西島建男 1979『教師再考』新泉社  
 『内外教育』 1970年5月8日「スト、もうできない財政難、日教組の7・10、11・13スト処分状況と救援対策」  
 堀尾輝久 1994『日本の教育』東京大学出版会。  
 山崎政人 1986『自民党と教育政策』岩波書店。  
 山住正巳 1987『日本教育小史』岩波書店

- (1) この小論は、平成7年度—平成8年度文部省科学研究補助金の研究成果報告書『教師文化からみた受験体制の社会学的研究』の一部を書き直したもので、教師と組合との関係について、特に、組合に対する教師の態度というテーマに焦点を当て、拙著『受験体制と教師のライフコース』（多賀出版、1998）への補足的議論として書かれたものである。なお、本文で使われている名前は仮名であるが、上記の本の中で使われているものと同一である。また、データ収集の方法、研究の枠組み、調査対象者のプロフィールなどの詳細については、紙面が限られているのでこの小論では省略されているが、その本の中で書かれている。
- (2) 日本教育会は1975年に発足した。愛知県では1981年2月中旬に愛高教の抗議行動の時期に結成された。当時、組織率40パーセントの愛高教は、左派組合といわれ、それに対抗する形で高校を中心に別組織として作られた。県支部規約には、賃金、定員、労働条件などの「事業」も含まれていて、労働組合的な色彩が強いが、所謂、第2組合であった。1968年頃まで愛高教が数回のストライキ闘争をやったが、その時に形成された反対派が教育会の中心メンバーであった（鎌田、1986、72-73頁）。